

## 無出産社会の到来で、性別は解体する

ゲスト 橋爪大三郎さん

インタビュアー 伏見 憲明

## 無出産社会は実現するか

伏見 今回は、未来から現在へ、というような視点で性の倫理を考えていきたいと思っています。橋爪さんをご著書『性愛論』の中で、将来、無出産社会が実現するとお書きになられています。まず、その無出産社会とはどういう社会なのか、というところからお話いただけますか。

橋爪 哺乳類には子宮というものがあって、メスの体内で、受精卵から個体になるまでの発生のプロセスを安全に管理する。これが妊娠。妊娠は、すべての動物にあるわけではなく、哺乳類の特徴です。妊娠のあとは、適当な時点でメスの体外に出るわけですが、これが出産です。

さて、人間も哺乳類ですから、この自然なやり方以外に、子孫を残す方法はなかった。けれども最近では、子どもを持つために自分で妊娠しなければならぬかという、もはやその必要がない時代になってきた。例えば、なにかの事情で妊娠できない女性が、別人のお腹を借りて自分の子どもを産んでもらう「代理出産」は、とっくに行われています。この技術はまだ一部の人のもので、あくまでも治療であるし、費用もかかる。けれども一部の人にとって利益のあることは、すべての人にとっても利益があるとも言えるわけです。女性にとって妊娠・出産は、やはり大きな負担です。もし便利で安全で安いほかの方法があれば、みんながそれを採用するかもしれない。そうした技術が誰にでも利用可能になるのが、無出産社会なのです。



橋爪 大三郎 (はしづめ だいさぶろう)  
1948年神奈川県生まれ。東京工業大学教授、専攻・社会学。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。著書に「橋爪大三郎コレクションⅠ/身体論」「同Ⅱ/性空間論」「同Ⅲ/制度論」(須草書房)、『性愛論』(岩波書店)、『橋爪大三郎の社会学講義』(夏目書房)他多数。

伏見 橋爪さんは、試験官ベビーのような百パーセント人為的なやり方よりも、ブタ子宮(異種動物の子宮をかりてヒトの受精卵を代理妊娠させる方法)が採用されるのではないかと予想されています。ただ、女性が妊娠から出産に至るまでの過程を苦労とかしんどいだけのことと捉えるのならそうなるでしょうが、“妊娠は女性にとって快樂でもあるのだから、それを手放すはずがない”という意見もあるように思いますが。

橋爪 本当にそれが快樂なら、めでたしめでたしです。が、人間は、イヌやほかの動物と違って難産なんですよ。二つ理由があって、一つは直立歩行するから骨盤がそんなに大きくない。むしろ狭くなっている。女性は出産するので、男性にくら

べれば骨盤の幅が広がってはいますが…。

つぎに、直立歩行とも関係がありますが、人間は脳とそれを入れる頭蓋骨が大きいのです。胎児の頭もそれなりに大きくて、出産のときには直径がギリギリなんです。だから生物学的に言って、人間の出産はかなり困難で、女性の負担も当然大きい。

伏見 そうするとやはり、妊娠・出産が快樂であるとは言い難い…。

橋爪 快樂という場合、二つの面があると思うんです。一つは自分と子どもとの関係。お腹の中に子どもがいるんだという感覚で10か月が過ぎて、その間に心の準備ができて女性から母親になっていく。そのあと通過儀礼のような出産という出来事がある、親と子が分離して、親子関係がスタートする。これにはホルモンの分泌などもからんで、女性の心も身体も変化していくわけです。こういうことも、女性ならではの体験という意味で、快樂と言え言えるかもしれない。

もう一つは、社会的なプライドの問題です。出産は神聖な出来事、子どもを産むのは立派な行為とされていて、みんな生命がけて産んできた。それは女として一人前である証しであり、充実感がある。社会的な期待に応えるプライドも、快樂なのかもしれない。

だけどよく考えてみると、生理的な変化のほうは、自分が妊娠しなくても現在はいろいろなホルモン薬があるから、コントロールできるかもしれない。心理的な準備のほうも、それが本当に心理的な問題だったなら、きちんと母親になるための教育をすることで解決するかもしれない。社会的なプライドにしても、社会が変化すればだんだん変わっていくでしょう。

伏見 でも、妊娠・出産がなかったら、多くの女性は人生に退屈してしまわないのかな。

橋爪 私は、やがてすべての女性が妊娠をやめてしまうだろう、と言っているのではないのです。それは、選択できるようになる。やっぱり伝統的な方法で、自然に子どもを持ちたいと思う人は、そういうふうになればいい。どれぐらいの割合の女性がそうするかは、女性の考え方ひとつです。



ただ、それがまったく自由に選べるようになる。これを無出産社会と言っているのです。

伏見 そういう無出産社会においては、女性が妊娠・出産することは自分にあえて苦役を課すマニアックな行為(笑)、という見方もできると思うんですけど、そうしたら、例えば妊娠・出産を経験したいという男性がいてもそれは許されるわけですよね?

橋爪 男性にははじめから、選択肢がなかったわけです。子宮がないと妊娠できませんからね。あえて言えば、腹腔妊娠(子宮外妊娠)だったら、男性にも可能かもしれない。

伏見 この前、それが理論的には可能だという発表がされたと報道がありました。

橋爪 だけど、無事に産むのは難しいから、わざわざそんなことをやる人はいないでしょう。本当に男性が妊娠・出産したければ、子宮を臓器移植してもらって、自分で産むしかない。でもその子宮を、誰に提供してもらおうでしょうね。これは、きわめつきのマニアの話になってしまうから、あんまり考えなくていいと思う。

伏見 トランスセクシュアル、性同一性障害の人たちの問題とちょっとからんでくると思うんですけど、少数者がやりたいと言った場合に、社会の側は「男性でも、まあ、いいんじゃない」というふうになるわけですか。

橋爪 心は女性だけど、身体は男性という人がいたとしたら、出産したいと望むのは正常な心理じゃないですか。本人は女性だと思っているのだから、考え方をええさせることはできない。ただ、子宮のように1個しかないものを、誰が提供して



くれるのかという問題があります。それをお金で売買したりすれば、またいろいろな議論が起こる。

無出産社会になるという話と、男性が妊娠してもいいんじゃないかという話は、別のことだと思う。

人間が妊娠しなくてもよくなるのが、無出産社会なので、心が女性の人でも、どうしても妊娠したいとは思わないだろう。女性なりに妊娠したいという男性は、無出産社会になる前の、いまだから現れているのかもしれない。

### 性別は解体する？

伏見 無出産社会でも、やっぱり子どもをつくり育てるのは家族という集団なんですか。

橋爪 無出産社会では、夫婦は、いつ子どもを持つか、ますます完全に計画し、コントロールすることになるでしょう。自分が妊娠するわけじゃないですから、計画して段取りを組んで、「じゃあいつごろ子どもができるとちょうどいいね」ということで、子どもが届く。育てる意志があって、準備もあって、経済力もある夫婦が子どもを持つわけです。反対に、経済力もないし、親になるつもりもないし、何の準備もできてない人は、子どもを持たないことになる。そうすると、ふつうの夫婦でない人びと、たとえばゲイのカップルだって、子どもを持つことを断る理由はないんです。生まれた子どもにお母さんだけ2人、お父さんだけ2人だったりしたら、学校でいじめられて傷つくんじゃないかという議論がよくありますが、それは世の中の考え方であって、世の中のほうが変われば、子どもがいじめられることもなくなる。カップルじゃなかったって、立派な大人が5~6人共同生活をしていて、「私たちは家族のような親密な集団だ。ついては次の世代を育てたい」と考え、養

子じゃなしに、自分たちの本当の子どもを迎えることも、自由になるかもしれない。

伏見 橋爪さんは、子作り・子育て、つまり再生産が生物学的な性から解放されていくと、性別というのが1つのイデオロギーに過ぎなかったことがはっきりして、だんだん解体していくのではないかということをおっしゃってますね。

橋爪 まず、結婚の制度から考えてみましょう。

結婚は、伝統的には、＜男女で行い、原則として1対1である＞。そして＜無期限である＞。「3年間結婚しましょう」とか「5年間結婚しましょう」というのは、結婚じゃないのです。相手が病気になるうと年をとろうと、どんなふうにも変わっても、結婚を継続する。離婚はできますけれどもね。もう一つは、＜生まれてきた子どもと一緒に育てる＞。家族の一員とするわけです。この三つが、結婚の条件になっている。

これはとてもうまくできた制度です。男性と女性をカップルにして、最低限の相互扶助組織としての役割を負わせることで、老後の問題がある程度解決している。男女の分業を織り込みつつ、経済的な問題（日々の生活）も、世代間の再生産の問題（子産み子育て）もいっぺんに解決してしまう。とてもうまくできているわけです。だから人類は、これまでのどんな文化でも、必ずこの結婚～家族という制度を、社会の基礎にしてきた。

では、女性とは何でしょう。女性とは、「子どもを生む可能性のあるもの、またはあったもの」。有名ですが、よくできた定義だと思います。そして男性は、「女性でないもの」と、残余カテゴリーとして定義される。

女性は子どもを生む可能性があり、男性はその可能性がない。そして男性と女性がカップルにならないと、自然なやり方で子どもは生まれません。こうした理由で、結婚は、女性と男性のペアでなければならなくなる。それがなければ、ゲイの人が全体の15%、20%を占める社会では、同性同士で結婚したいという人びとがそれなりの割合で出てきて当然でしょう。そうすると、異性愛が当然で同性愛がマイノリティだという前提も崩れてくる。無出産社会になると、こういう方向に進むん

じゃないだろうか。

もともと男性と女性は、自然な意味では、いわば二種類の人間ですから、放っておけば別々の方向に分化して、互いに違ったものになる。カップルの組み方としても、男女が相変わらずマジョリティにはなると思うんです。ただそこに、選択の要素が入ってくる。ひとつ私が思うのは、ほんとうに男女の性差がなくなる可能性です。

身体はともかく、脳内性差に関して、ホルモンの働きが何かで、男性の脳と女性の脳の働きが少し違ったりする、そのメカニズムが完全にわかったとしますね。そうすると、必ずそれをなくしたいと考える人が出てくる。この薬を飲むと女性的に思考できるようになるとか、この薬を飲むと男性的に思考できるようになるとかいった、介入の仕方が可能になります。

伏見 …それと性別がイデオロギーに過ぎないということはどういうつながりが…？

橋爪 多くの人びとが、この世に男性と女性が存在すると信じているとしても、それは必ずしも身体に根拠を持つわけではないのです。

伏見 でも、脳内性差の話とかでは、身体にも性差はあるわけですよ。

橋爪 身体にも性差があったとしても、それを選択の対象にしてしまえば、身体に性別の根拠がないことになってしまうでしょう。ふつう、最後に残ると言われている男女の違いは、妊娠・出産でしょう。だけどそれすら選択の対象になれば、身体としては男性と女性の違いが残っていても、何ら違いとするに足りないことになる。そうすると、それでもほんとうに最後の最後に残るのは、脳内性差なんです。そこで、脳内性差もコントロールできてしまうことになれば、男と女ではなくて、単に人間というものが存在するということになる。選択の結果、男性になったり女性になったりできることになる。

伏見 社会制度として、例えば日本だったら戸籍制度がありますけど、住民票の登録とかパスポートとかで、いちいち男・女ってクレジットしなきゃいけないですよ。そういう社会制度としての性別というものは無出産社会ではどうなるのでし

よう。

橋爪 意味がなくなってくる。

伏見 意味がなくなってくるということは、なくなるということなんですか。

橋爪 だからそれは、選択の対象になる。

言い方をかえれば、

個人のプライバシーになっていくわけです。性別は、人種みたいなものに近くなると思いますね。アメリカでは例えば、誰もがエスニック・バックグラウンドを持っていて、「私は昔アルメニア人でした」とかいちいち言ってもいいし、それらしい名前を残しておいたりしてもいいけれど、名前は変えられるし、エスニック・バックグラウンドを隠したり、それにこだわらない生き方もできる。

伏見 インターセックスの人が最近声を上げてるのですが、その一番ラディカルな主張だと、性別二元制を解体せよというようなことがあるんですね。やっぱりそういう二元制自体がなくなっていくのでしょうか。

橋爪 簡単になくならないと思います、これはかなり強固なものだから。家族というものがなくならず、出産のやり方は選択的になったけれど家族を再生産するには男性と女性の役割が大事であり、父とか母とかいう概念が意味がある、とみんながまだ思っている間は。そういう人たちがまだマジョリティのうちには、その人たちにしてみれば、男女の区別がなくなることは、自分たちの行動パターンの基礎を掘り崩すものになってくるわけで、当然、文句も言いたくなる。伝統的な文化では、相手の性別を知るだけで、相手の行動がある程度予測可能になっていた。男女の別があると、話が簡単になったのです。それがなくなってしまうと、具体的な人間関係をつくらうとする場合、すごく手続きが複雑になってしまう。そういう社会的コストを、すべての人に要求するというのはかなり大変なことです。だから、さっきのお話の



ような人たちがマジョリティになるというのは、ちょっと社会にとっては負担しきれないと思う。だから当面は伝統的なやり方を続け、その枠に収まらない人たちは、まあ自由に一部分でやってください、としたほうが均衡しやすいと思います。

伏見 社会的コストという考え方が、ポイントなんです。橋爪 コストを払えば、利益はあるかもしれない。けれども、コストが高すぎたら、誰もそんなことしませんね。性的行動の様式に関しても、いま、男性/女性という伝統的なやり方で、それなりにうまくいってるのに、これをすべてなくして一から始めようということになると、そこから利益もあるのですが、当面ものすごいコストがかかる。

### 売春のどこが悪い

伏見 ところで、無出産社会が実現したときには、女の人が妊娠・出産という拘束期間から解放されるわけですから、現在のフェミニズムの課題は、全部解消されているということですか。

橋爪 いや、そうも言えないと思います。男性/女性という区別が生きている間は、女性であるから被らなければならない問題が残ると言えるからです。しかし、いまの性別分業の問題の大部分は、妊娠・出産から派生しているわけです。そこで、コウノトリ的に子どもが与えられることになれば、母親も父親も立場は対等で、同じような家事を分担し、同じように職業を続けていこうということになり、そうなればかなり男女不平等の問題は解決すると思います。

伏見 それって、無出産社会では家父長制が解体されているということですよ。

橋爪 「家父長制」って、なんでしょうね。よく聞いてみたら、どうも“家族の中で男がいばる”ということらしい。無出産社会だって、理由はともかく、家族の中で男がいばってれば、やっぱり家父長制なのでしょう。ただし、ますますその根拠はなくなる。家父長制の根拠が、「女は子どもを生みなさい、子どもを生むと働けないのだから、父親で男の俺が稼いでやる」といったことからの積み重ねなのだと

すれば、無出産社会になれば、家父長制の根拠はほとんど解体している。が、しばらくの間は持続するというのはあるかもしれない。

伏見 そのとき買売春というのはどうなってるんでしょう。

橋爪 買売春というのは、日本であれどこの国であれ、男が買い女が売ることになってますが、考えてみれば、その反対だって別にいいわけです。にもかかわらず、たいていの場合、男性が買い女性が売るといふようになる理由には二つあって、一つは社会・経済的な問題。富の配分が男女のあいだでそもそも不平等であると、不平等を是正する方向に再配分が起こる。それに社会・文化的な問題、男性に寛容で女性に厳しいという性のダブルスタンダード（二重基準）がからむと、供給が少なくなり、なおさら女性の相場が上がるわけです。もう一つ、身体的・生理的な理由もあるかもしれない。男性でそういう職業に就こうと思っても、生理的に無理があり、けっこう体を鍛えたり大変でしょ。

伏見 買売春というのは家父長制にかかわらず、やっぱり存在するものでしょうか？

橋爪 家父長制のもとでは、家父長制的な買売春が行われると思うけれど、家父長制が一切なくなって、家族の中で男がいばらなくなったとしても、買売春というものはある。

伏見 橋爪さんは「売春のどこが悪い」という論文をお書きになりましたが。

橋爪 この問題を考えるときに、買売春がいけないという論文をいくつも読んだのです。するとどの論文も、ロジックとしては、「買売春はこれこれこうだから悪い」と書いてあるんです。買売春自体が悪いとは書いてないのです。例えば、「買売春は女性を差別するから悪い」「買売春は健全な道徳観念に反するから悪い」「買売春は性病を広めるから悪い」。その「これこれだから」というところは、確かに悪いことなのです。けれども、もしも売春と「これこれ」との因果関係が断ち切られ、売買春の副作用である「これこれ」の部分が解決されてしまったら、そうした議論の内部では、売買春それ自体がいいか悪いかということとは

判断できなくなってしまうんです。これは要するに、これまで、売買春それ自体が悪いということを実証した人はいないということではないのか、と思った。

伏見 援助交際というのはどうなるんでしょう。橋爪 それは、未成年者だから問題なのです。未成年者は、成人（親）の保護者の下にある。そうであるから、親が許可しないことはやっちゃいけない。ただし、では、親が認めればいいのかと言えば、そうはいきませんよ、保護者はこうあるべきだという、社会的通念があります。現実の親はバカな場合もあるから、子どもはバカな親の言うことを聞いてもいけない。チャイルド・ポルノに子どもを出演させて日銭を稼いでいるのは、そうしたバカな親でしょう。現実の親でなしに、「まともな親ならば言うであろうこと」に、子どもは従うべきなのです。保護者が必要な段階の人間というのは、その種のことに関する自己決定権がないんです。

伏見 「売春がいけない」という社会通念がある間は援助交際はいけない、ということになるんですか。

橋爪 そうじゃなくて、売買春がいいか悪いかは別として、それを成熟した人間が、自己決定をして行っているとしますね。その場合でも、自己決定権がない人はしっちゃいけないんだから、未成年者はやってはいけないのです。援助交際は売買春ではないかもしれないが、やはりいけないという理屈になる。酒やタバコと同じですよ。酒はいちおう社会通念として良くないものだけれども、それでも個人の自由だという考え方があるんですね。愚行権というやつです。

伏見 その愚行権は、未成年者にはない？

橋爪 愚行をしちゃいけないから、保護者がいるんです。人間はまったく無能力な状態で生まれて、徐々に一人前の大人に育っていく。その途中に、いろいろ年齢の関門を設けて「何歳からこう」「何歳ならこう」と自己決定権の範囲を少しずつ拡大していきますよね。このような制度は、永遠不滅だと思う。

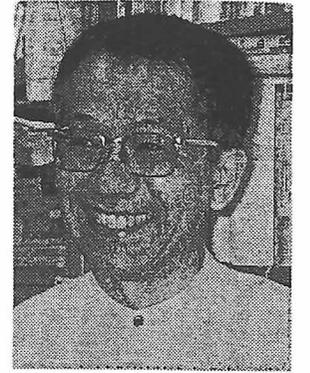
保護者は、子どもの人権というか、選択権を

制限しているわけです。それが、本人の人権を守るということになるという考えなわけです。で、援助交際は、この制度に抵触するからいけないことになる。

伏見 未成年者のセックスもいけませんか？

橋爪 いけませんねえ。これは文化の問題だけれども、一応禁止事項に入っている。ケース・バイ・ケースだけれども、原則はだめです。だから子どもは親に隠れてやるわけだよ。決まってるじゃない。人は最初に、セックスをする能力が発達するわけ。つぎに、これをコントロールする能力と、意思決定をする能力と、結婚する社会的能力がそなわっていく。そこに、時間的なギャップがあるわけです。セックスをする能力もないのに、無理矢理セックスを強いるというのがあって、これは幼児虐待ですけども、絶対にだめ。つぎに、本人が性的に発達しはじめて、身体的能力が少しずつ成熟してきても、我々の社会ではしばらくのあいだ、本人の勝手にさせずに保護者がコントロールする。たしかに、コントロールなんか全然しないで、若者は勝手にやりという社会もありますよ。ただ我々の社会は、性行動が恋愛とか結婚とかいろいろな制度と結びついているので、そのモラルを身につけないと、正常な社会人になれないと、社会が認識している。だからその段階では、親がコントロールしなさいということなのです。伏見 社会制度の原理原則から、援助交際などの是非を考えていけばいいということですね。

本日は大変勉強になりました。



伏見 憲明（ふしみ のりあき）1963年東京生まれ。評論家。慶應義塾大学法学部卒業。91年「プライベート・ゲイ・ライフ」（学陽文庫）を書いてカミングアウト。以後文筆活動や講演活動を通してゲイ・ムーブメントの先駆的役割を果たす。セクシュアリティ、ジェンダー、若者、家族等にも、鋭い視点で発言を続けている。著書に「快楽の技術」（高藤綾子氏と共著、河出文庫）「スーパーラヴ！」（祥伝社文庫）「＜性＞のミステリー」（講談社現代新書）ほか。